

# Brouwer の不動点定理

よしいず

2012-12-23



集合  $X$  の元  $x$  が写像  $f : X \rightarrow X$  の不動点であるとは、 $f(x) = x$  が成り立つときにいう。

**[命題 1]**  $\mathbb{R}$  の閉区間  $[a, b]$  から  $[a, b]$  自身への連続写像は不動点をもつ。

**[証明]**  $f : [a, b] \rightarrow [a, b]$  を連続写像とする。  $a \leq f(a)$  かつ  $f(b) \leq b$  である。  $f(a) = a$  のとき、 $a$  が  $f$  の不動点である。同様に、 $f(b) = b$  のとき、 $b$  が  $f$  の不動点である。  $a < f(a)$  かつ  $f(b) < b$  のとき、写像  $g : [a, b] \rightarrow \mathbb{R}$  を  $g(x) = f(x) - x$  によって定めると、 $g$  は連続写像であり、

$$g(a) = f(a) - a > 0,$$

$$g(b) = f(b) - b < 0$$

であるから、中間値の定理により、ある  $c \in [a, b]$  が存在して、 $g(c) = 0$ 、すなわち  $f(c) = c$  であり、 $c$  は  $f$  の不動点である。 □

$n \geq 1$  を整数とする。  $n$  次元 Euclid 空間  $\mathbb{R}^n$  の点

$$\mathbf{x} = (x_1, x_2, \dots, x_n),$$

$$\mathbf{y} = (y_1, y_2, \dots, y_n)$$

に対して,  $\mathbf{x}, \mathbf{y}$  の内積  $(\mathbf{x} | \mathbf{y})$  を

$$(\mathbf{x} | \mathbf{y}) = \sum_{i=1}^n x_i y_i$$

により定める. また,

$$\|\mathbf{x}\| = \sqrt{(\mathbf{x} | \mathbf{x})} = \sqrt{\sum_{i=1}^n x_i^2}$$

を  $\mathbf{x}$  の長さ (あるいは, ノルム) という.  $\|\mathbf{x}\|$  は負でない実数であり,  $\|\mathbf{x}\| = 0$  となるのは  $\mathbf{x} = \mathbf{o}$  であるとき, またそのときに限る. ここで,  $\mathbf{o}$  は原点を表す. さらに,  $\mathbf{x}, \mathbf{y}$  がともに  $\mathbf{o}$  でないとき, Schwarz の不等式により,

$$-1 \leq \frac{(\mathbf{x} | \mathbf{y})}{\|\mathbf{x}\| \|\mathbf{y}\|} \leq 1$$

が成り立つ. したがって, ある実数  $\theta$  がただ 1 つ存在して,

$$\cos \theta = \frac{(\mathbf{x} | \mathbf{y})}{\|\mathbf{x}\| \|\mathbf{y}\|}, \quad 0 \leq \theta \leq \pi$$

が成り立つ. この  $\theta$  を  $\mathbf{x}, \mathbf{y}$  のなす角という. 幾何的には, 原点  $\mathbf{o}$  から点  $\mathbf{x}, \mathbf{y}$  へ向かって引いた 2 つの線分の  $\mathbf{o}$  における角が  $\theta$  である.

[補題 2]  $n \geq 1$  を整数,  $\mathbb{R}^n$  を  $n$  次元 Euclid 空間,  $\mathbf{x}, \mathbf{y}$  を  $\mathbb{R}^n$  の点とし,  $\|\mathbf{y}\| \leq 1$  であるとする. このとき,

$$\|\mathbf{x}\|^2 \|\mathbf{y}\|^2 - (\mathbf{x} | \mathbf{y})^2 \leq \|\mathbf{x} - \mathbf{y}\|^2$$

が成り立つ.

[証明]  $\mathbf{x} = \mathbf{o}$  または  $\mathbf{y} = \mathbf{o}$  のときは明らかである. 以下,  $\mathbf{x}, \mathbf{y}$  はともに  $\mathbf{o}$  でないとする.

$\mathbf{x}, \mathbf{y}$  のなす角を  $\theta$  ( $0 \leq \theta \leq \pi$ ) とする. 2つの点  $\mathbf{x}, \mathbf{y}$  の距離は  $\|\mathbf{x} - \mathbf{y}\|$  であり, 原点  $\mathbf{o}$  と点  $\mathbf{y}$  を通る直線への  $\mathbf{x}$  からの垂線の長さは  $\|\mathbf{x}\| \sin \theta$  であるから,

$$\|\mathbf{x} - \mathbf{y}\| \geq \|\mathbf{x}\| \sin \theta.$$

一方,  $\|\mathbf{x}\| \sin \theta \geq 0$  かつ  $\|\mathbf{y}\| \leq 1$  より,

$$\|\mathbf{x}\| \sin \theta \geq \|\mathbf{x}\| \|\mathbf{y}\| \sin \theta.$$

ゆえに,

$$\begin{aligned} \|\mathbf{x} - \mathbf{y}\|^2 &\geq \|\mathbf{x}\|^2 \|\mathbf{y}\|^2 \sin^2 \theta \\ &= \|\mathbf{x}\|^2 \|\mathbf{y}\|^2 (1 - \cos^2 \theta) \\ &= \|\mathbf{x}\|^2 \|\mathbf{y}\|^2 - (\mathbf{x} | \mathbf{y})^2 \end{aligned}$$

となる. □

$n$  次元球体  $D^n$  および  $n - 1$  次元球面  $S^{n-1}$  を

$$D^n = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid \|\mathbf{x}\| \leq 1\},$$

$$S^{n-1} = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid \|\mathbf{x}\| = 1\}$$

により定義する.  $S^{n-1}$  は  $D^n$  の境界である.

**[定理 3 (Brouwer の不動点定理)]**  $n \geq 1$  を整数とする.  $n$  次元球体  $D^n$  から  $D^n$  自身への連続写像は不動点をもつ.

**[証明]**  $n = 1$  の場合,  $D^1 = [-1, 1]$  であるから, 命題 1 より明らかである.

$n \geq 2$  の場合を背理法により証明する.  $n$  次元球体  $D^n$  から  $D^n$  自身への連続写像  $f : D^n \rightarrow D^n$  が不動点をもたないと仮定する. そのとき, 各々の  $\mathbf{x} \in D^n$  に対して,  $f(\mathbf{x}) \neq \mathbf{x}$  であるから,  $f(\mathbf{x})$  から  $\mathbf{x}$  に向かう半直線を引くことができる. この半直線と  $S^{n-1}$  との交点を  $r(\mathbf{x})$  とする. これにより, 連続写像  $r : D^n \rightarrow S^{n-1}$  が定まる. 具体的には,

$$r(\mathbf{x}) = f(\mathbf{x}) + t(\mathbf{x})(\mathbf{x} - f(\mathbf{x}))$$

とおく. 各々の  $\mathbf{x} \in D^n$  に対して,  $\|r(\mathbf{x})\| = 1$  となるよ

うに  $t(\mathbf{x})$  を定める:

$$t(\mathbf{x}) = \frac{\|f(\mathbf{x})\|^2 - (\mathbf{x} | f(\mathbf{x})) + \sqrt{\delta(\mathbf{x})}}{\|\mathbf{x} - f(\mathbf{x})\|^2},$$

$$\begin{aligned}\delta(\mathbf{x}) &= \|\mathbf{x} - f(\mathbf{x})\|^2 + (\mathbf{x} | f(\mathbf{x}))^2 \\ &\quad - \|\mathbf{x}\|^2 \|f(\mathbf{x})\|^2 \\ &= (1 - (\mathbf{x} | f(\mathbf{x})))^2 \\ &\quad - (1 - \|\mathbf{x}\|^2)(1 - \|f(\mathbf{x})\|^2).\end{aligned}$$

ここで,  $f(\mathbf{x}) \in D^n$  であるから, 補題 2 より,  $\delta(\mathbf{x}) \geq 0$  である.

$\mathbf{x} \in S^{n-1}$  のとき,  $t(\mathbf{x}) = 1$  となり  $r(\mathbf{x}) = \mathbf{x}$  が成り立つ. 一方,  $S^{n-1} \subseteq D^n$  より, 包含写像

$$\iota: S^{n-1} \rightarrow D^n, \quad \mathbf{x} \mapsto \mathbf{x}$$

が定まる. ゆえに, 合成写像  $r \circ \iota$  は  $S^{n-1}$  上の恒等写像である. このとき,  $r \circ \iota$  から誘導されるホモロジー群の準同型写像

$$r_* \circ \iota_* = (r \circ \iota)_* : H_{n-1}(S^{n-1}) \rightarrow H_{n-1}(S^{n-1})$$

は恒等写像になる. よって,

$$\iota_* : H_{n-1}(S^{n-1}) \rightarrow H_{n-1}(D^n)$$

は単射である. ところが,

$$H_{n-1}(S^{n-1}) = \mathbb{Z},$$

$$H_{n-1}(D^n) = 0$$

であるから,  $\iota_*$  は単射でない. これは矛盾である.  $\square$

## 参考文献

- [1] 服部晶夫：位相幾何学，岩波書店，1991.

